

浄土教と如来蔵思想（博士論文要旨）

水 谷 幸 正

一

本研究の目的および問題の所在はつぎのとおりである。

浄土教思想は諸大乘經典にわたって広く説かれているが、とくにシナにおける浄土教では、(一)中觀思想を背景とした浄土教、(二)瑜伽唯識思想を背景とした浄土教、(三)いわゆる道綽・善導流の浄土教、といった大別すれば三系統の浄土教を形成している、といわれている。このように一口に浄土教といっても、その背景には大乘仏教の重要な思想体系が影響を及ぼしていることが確認されているが、これらの中觀、瑜伽唯識という体系と肩を並べる如来蔵思想を基盤とした浄土教の存在は予想されるとはいえず、その研究はいまだ成果があがっていないのが実状である。もちろん、このように単純に類型化して扱う思想研究の方法には限界があり、それをもって複雑な思想の流れを明かすことは不可能である。また、如来蔵思想の展開が、般若の空思想に立脚しながら、無と有、超越と内在、を止揚総合しようとしたものであると言えるし、瑜伽唯識思想も般若空思想の上に展開したものであるから、三者は相互に密接な関係にあることはいうまでもない。しかし、ここに浄土教と如来蔵思想とを別立して、それぞれの思想の究明と両者の思想的かかわりを考究することによって、大まかな一つの方向が究明されるであろうことが期

待される。

二

如来藏思想の研究は、學術誌に發表された面より判断すれば、六十五年前に花田凌雲博士が六条學報に發表した「如来藏經の如来藏の劈頭」から始まる、といつてよい。本格的な研究がおこなわれたのは、昭和時代になつてからであり、望月信亨、月輪賢隆、宇井伯壽、広瀬文豪という諸博士によつて、仏敎思想、唯識思想、大乘起信論の思想などの関連において研究されていたようであるが、とくに、月輪博士が、究竟一乘宝性論をとりあげたことは注目し得る。ともあれ、如来藏思想研究が、仏敎學界において脚光をあびたのは、やはり戦後であつて、とくに E. H. Johnston による *Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra* の梵本出版が、一層の拍車を加えた、といつてよい。かくて、如来藏思想研究は、そのすわりを宝性論におくようになったのであり、言いかえれば、宝性論が如来藏思想研究の根本資料としての地位を占めるようになった。梵・藏・漢の三本を具備した宝性論は、その内容からみて、如来藏論といつても差支えない。この論を中心に、これと類似する仏性論、無上依經、大乘法界無差別論などをもつて、如来藏思想を組織的に説明することができるのであり、また宝性論における引用から、如来藏經、不増不減經、勝鬘經の三經が基本的な經典として研究されている。また、般若經、華嚴經、法華經、涅槃經というような大乘經典の主要なものや瑜伽唯識學派の諸論書との関係や、大乘入楞伽經やインド後期大乘諸經論の思想、などが研究されるにいたつてゐる。

戦後發表された如来藏思想に関する著書や論文を整理してみると、約百十種を挙げることができる。さらに最近、高崎直道博士によつて『如来藏思想の形成』（春秋社）なる大著が刊行されたことは周知のことであるが、このよ

うな著書や論文を試みに五つの傾向に分類してみると、次のようになる。

- 一、経論や論書の研究を中心にしたもの。
- 二、理論的・思想史的研究をねらいとするもの。
- 三、フィロソフィカルな研究にすわりをおいたもの。
- 四、如来蔵思想ととくに関連するもの。
- 五、シナ、日本仏教に関するもの。

これらの研究内容について詳しく論述することはできないが、一般的な研究動向として、つぎのことが言えそうである。まず、文献研究や語義の研究、つまりフィロソフィカルな面において著しい成果をあげている、ということである。したがって、これらの成果を総合することによって、どのように体系化してゆくか、ということが今後の課題である、といえよう。つぎに、如来蔵思想ということの特に別立する必要から、この研究がとりあげられたころは、如来蔵思想プロパーの研究が多かったが、最近では、ひろく大乘仏教思想研究一般の中でとりあつかわれるようになってきているので、さきあげた論文以外にもあちこちで散見するようになった。そのことは、「如来蔵思想研究」の地位が、仏教思想研究の中でいわば市民権をようやく獲得した、ということになるか。ともかく、このような最近二十年間の諸学者の著しい研究成果を背景に、本研究が推進されることをつけ加えておく。

三

如来蔵思想は、「成仏する」という仏教の究極的な目的に、理論的な根拠を与えるものである。したがって、それは釈尊の根本仏教以来の諸々の仏教思想、なかんづく大乘仏教の諸思想や諸教学の基盤となるばかりでなく、仏

教全体に通ずる根本教義を形成するものである。さきにも述べたように、インド大乘仏教思想は、中觀と瑜伽の両学派の系統に大別されて考察されているが、それとは別に如来藏思想が組織体系化されていたこと、しかも両学派とは密接な関係を持っていたことは当然であるが、竜樹より世親にいたる時代において大乘仏教思想の中心をなしていたのが如来藏思想である、ということが現在では学界一般に承認されているところである。では何故に、両学派以外に如来藏思想が別立されねばならなかったのか、また如来藏ということが大乘仏教思想の中で重要な意味をもって定着したのはいつの頃であるのか、ということについても、徐々に明らかにされつつあるが、両学派以外の思想とのつながりについては、未だ充分に明らかにされておらず今後の課題であろう。ただここで一つの方向として言えることは、両学派の思想が学問的に深められるにしたがって、理論としてはなるほど精緻を極めるにいたったかもしれないが、仏教本来の宗教性が稀薄になったであろうことは否めない。この宗教性を再生する要求に応えるものが、理論面では如来藏思想であり、実践面では浄土教であったといえよう。そのことは、宝性論の一部始終が結局は「信」をもって貫かれており、信解を強調する論書である、ということからも伺い知ることができる。

文献学的に經典や論書をもって、別立される所以をたしかめてみるに、さきにあげた如来藏經、不增不减經、勝鬘經の三部經を第一期如来藏經典として位置づけることができるし、宝性論などの一經三論を第二期如来藏經論、楞伽經ないし瑜伽中觀学派の論書（大乘起信論までも含めるかどうか問題はがあるが）を第三期如来藏經論の主流をなすものとみなしてよい。

シナでは、大乘起信論を中心に、地論学派や華嚴学派の系統において、如来藏縁起思想、真如縁起思想として展開していつているのであり、そのことは浄影寺慧遠や賢首大師法藏の教学によって知ることができる。また、仏性思想は涅槃学派や天台学派の系統に受けつがれていったと言える。北魏の訳経僧菩提流支の周辺の研究が今後の課

題といえようか。

チベットでは、宝性論が *Rgyud-ble-ma*, *Utara-tantra* すなわち、最高の要義、最後の秘義、奥義と名づけられて重要視されている、ということだけでも、如来蔵思想がタントリズム仏教に大きな影響を与えているかを知ることができよう。直接日本の浄土教に関係がないにしても、タントリズムの究明によってもたらされる成果に期待するものが多分にある。

日本の各宗派の教義の形成に基盤を与えているものとして、如来蔵思想は当然注目されねばならない。たとえば、華嚴、天台はいうにおよばず、天台と同じく法華經を所依とする日蓮宗系はもちろんであろうし、直指人心見性成佛といって教外別伝を旨とする禪宗における、その「心」の理解の仕方は、心性本淨説に由来するものであるうから、如来蔵思想を根底にすえるものである。また、胎蔵界マンダラを中心におく真言密教も如来蔵ときわめて密接な関係にあることはいままでもない。

このように、日本の諸宗派はすべて如来蔵思想の具体的な展開として理解することができるが、では浄土教においてはどうか、ということが問題になってくる。ここに本研究の出発点があり、問題の基本的な所在がそこにある。浄土教もまた如来蔵思想の展開としておさえなければならぬ。法然上人の選択集において、傍らに往生浄土を明かす教えとして、宝性論や大乘起信論や攝大乘論などを挙げているが、それは「命終の時に無量寿仏を見たてまつらん」という題文が宝性論の最後を締めくくっており、それが攝大乘論世親親真諦訳本の最後に引きつがれていて、善導大師の往生礼讃に引用されていること、大乘起信論にも修行信心分の結びとして「専念西方極樂世界阿彌陀仏、所修善根回向願求生彼世界即得往生」という經典の文句を引用していること、などに由る。しかし、そのよくなことだけで如来蔵思想が浄土教と関係がある、とみなすことは不充分である。何故に、宝性論や起信論にその

ような願生淨土の思想が表明されているのか、ということを構造的に把握しなければならぬ。たとえば、宝性論に説く「如来藏」の概念の意味するところや、「信解」の語の内容などを検討することによって、あるいはまた自身論や人間觀の展開を究明することによって、淨土教との内面的なつながりを明確にすることができるのではないか。このことが、大乘仏教思想から淨土教思想への展開をおさえることになるのであり、言いかえれば、淨土教思想解明の基礎的研究になると思う。つまり、大乘仏教としての淨土教の思想的展開、宗教的ひるがえりの基礎を形成するものが如来思想ではなからうか、という予測のもとに本研究が進められているのである。現在の時点における日本淨土教は、古今楷定といわれる善導大師の思想、および選択本願を標榜する法然上人の精神が中核をなしていることはいうまでもない。したがって、その背景を一直線にインド大乘仏教に及ぼし求めても正鵠を得ないであろう。それについては、別の研究課題を形づくるものであるが、それはひとまず括弧に入れて、本研究の目的は、仏教思想としての淨土教の思想的根柢を明らかにすることにある。

四

そのためには、まず如来藏思想の基本を明確にする必要がある。如来藏の語を定義すれば「如来藏とは仏性とシノニムである」と一般に理解されているように、煩惱に覆われ隠蔽されている衆生中の本来清淨な如来法身すなわちへざとり」の本性を指すのであって、そのざとりの本性である仏性を如来藏と名づけるのであり、またその仏性を持つ衆生をも如来藏と呼ぶのである」と説明できる。勝鬘經に説く在纏の如来藏、出纏の法身という考えがそれである。

このことの思想的構造を明らかにしていったのが宝性論である。(一)仏智が衆生に内在していること、(二)衆生は真

如と不二であること、(三)衆生がすでに仏果を持っていること、の三義から、衆生に如来蔵がある、と説かれるのであり、また、(一)如来の法身が遍満していること、(二)如来の真如が無差別であること、(三)如来の種性が有ること、の三義によって、衆生が如来蔵である、と説くのである、という。この後の三義は、如来蔵を明かす論理構造の宝性論を通じての綱格をなすもので、三種自性と名づけられ、仏性論において、所摂蔵、隱覆蔵、能摂蔵という蔵の三義にひきつがれてゆくのである。如来蔵義の基本をここにおくことができるとともに、浄土教の構造とのつながりもここにみることができるといえる。この如来蔵義は、唯仏与仏の境界があり、ただ信解すべきものである、というから、それは、眞実の世界（絶対存在、最高實在といつてよい）が主体を通して顕現する宗教的實在のありようの説明原理である、とするならば、この点においてこそ、浄土教の実践原理と根源的につながっていると云えようか。

つぎに、初期仏教以来の如来蔵思想形成へのあとづけを考慮しなくてはならない。一つのある萌芽的な思想から直線的に結実していったのではなくして、多くの思想が互いに補いあって体系化されていったものであるから、それらを明かすことがそのまま浄土教思想形成のあとづけを明かすことにもつながってくるはずである。如来蔵思想形成の有力なものとして一般に承認されているのが心性本淨説であるが、ただそれだけで充分に説明されるわけではない。仏教の根本思想である「縁起の本意を開顯」するものであり、「般若空」思想の歴史的発展であることは、すでに学者によって論ぜられているが、そのほか仏種や仏子の思想、法身常住の思想、菩薩がナおよび菩薩思想、garbha, gotra, dhātu, bija などの意味、舍利塔崇拜運動、などを注目しなければならない。しかし、なんといいても、釈尊の發心、そして成道ということ、これをわれわれに即しているならば、さとりへ志向する、つまり菩提心を發すということ、そして、さとりを開く、つまり隱蔵かくされていたものを顯現あちわす (parivṛti) ということ、この發心から成道へという成仏道の根柢を与えるものとして展開していったのが如来蔵思想である。最古の經典と

いわれる如来藏經の中に、淨土教思想との関連を暗示する説相が読みとれる。たとえば、如来の光明に照らし出された国土の説明、法身常住および塔崇拜による仏徳の讃歎、文殊、観音・勢至・金剛慧の四菩薩による大悲願の思想、などである。

本研究は、以上のような問題意識のもとに如来藏思想と淨土教思想との二篇にわかつて、左記の章・節にしたがって論究したものである。

第一篇 如来藏思想

第一章 如来藏思想史研究序説

第一節 如来藏思想史研究の態度及びその意図

第二節 仏教思想史上における如来藏思想の地位

第三節 如来藏の語義及び概念

第四節 如来藏思想に関する經典論書の検討

第二章 如来藏と仏性

第一節 如来藏義について

第二節 仏性義について

第三章 Dhātu と Gotra

第一節 Dhātu と Gotra

第二節 Gotra と Gotra

第三節 宝と性について

第四章 大乘涅槃經典群にあらわれたる危機思想

第一節 問題の立場

第二節 危機意識の分析

第三節 大乘涅槃經典群の資料的整理

第四節 六卷泥洹經にみられる危機思想

第五節 傍系經典群における概要

第六節 結語

第五章 一闡提攷

第一節 問題の所在

第二節 原語的名義の整理

第三節 思想史的背景の系譜

第四節 大乘涅槃經における諸相とその意義

第五節 宝性論における取扱い

第六節 結語

第二篇 浄土教思想

第二章 浄土經典と如来蔵思想

第一節 宝性論における廻向偈

第二節 如来蔵思想の意義

第三節 大乘仏教としての浄土教と如来蔵説

第四節 浄土經典と如来蔵經論との関連

第二章 浄土教と如来蔵

第一節 浄土と如来蔵

第二節 如来蔵義と浄土

第三節 結語

第三章 阿弥陀仏報身論

第一節 問題の所在

第二節 仏身論と諸問題

第三節 法身と法

第四節 報身と願生思想

第五節 結語

第四章 蓮華化生について

第一節 蓮華化生の典拠

第二節 如来蔵的解明

第五章 機根名義考

第一節 機根について

第二節 機と器

第三節 結語

第六章 唐善導における至誠心積について

第一節 問題の所在

第二節 諸經典に現われた至誠の意義

第三節 結語

第七章 唐善導における廻向発願心と発菩提心

第一節 問題の所在

第二節 浄土教の菩提心について

第三節 度衆生心

第四節 善導の發菩提心

第五節 廻向発願の六合釈

第六節 結語

第八章 法然淨土教の特質

第一節 凡入報土の機

第二節 万機普益の機

第三節 勝義の機

第九章 法然淨土教の内面的理解

第一節 大乘仏教と如来藏思想

第二節 淨土教の根底としての如来藏思想

第三節 結語